



# 目次

## 愛清フウカと牛牧ジュリのご奉仕愛妻生活 005

愛清フウカ・牛牧ジュリ by 黒胡椒サラミ

#3P #いちラブ #甘々 #半同棲 #食後えっち #お風呂えっち

## 悪魔のわけまえ 023

旗見エリカ by ナシ・アジフ

#筆おろし #騎乗位 #中出し

## 翼を広げて 041

空崎ヒナ by 内田弘樹

#必殺のダブルM字開脚 #背面駅弁（翼を左右の壁について）

## 究極の美食、味わいませんか？ 057

黒館ハルナ by なるみ

#南国・南の島 #ロスト・パラダイス・リゾート  
#ポリネシアン・セックス #スローセックス #イチラブ

## 淫蕩の宴

徹夜明けの二人は汗だく種付け交尾しかしたくない 079

天雨アコ by アラベスク

#シックスナイン #アナル舐め #フェラチオ #種付けプレス  
#中出し #♡喘ぎ #汗だくセックス

## イズミは先生のキンタマの中身を分け合いたくない 099

獅子堂イズミ by デイジー亭

#噴乳 #アナル舐め #孕ませ #ザーメンジョッキ  
#ハルナは添えるだけ #純愛イチラブ尊厳破壊ドスケベセックス

きらら♡ちあふるっ!

121

夜桜キララ

by kota

#チアコス #乳首責め騎乗位 #キラキラ部 #中出し #いちゃラブ

カスミとメグの湯より熱い一夜の話

131

下倉メグ・鬼怒川カスミ

by スバル

#ふたなり #騎乗位 #乳首責め

元宮チアキのパパ活プレイ

141

元宮チアキ

by ブルアカR18怪文書

#パパ活 #デート #男性優位

赤司ジュンコは食べられて、満たしたい

157

赤司ジュンコ

by パセリ

#独占欲 #玉舐め #イチャラブ

お湯の香りにあてられて

177

火宮チナツ

by あーばいん

#風紀委員会 #温泉 #女性上位 #♡喘ぎ #パイズリ

淫乱の星 羽沼マコト☆奮闘記

193

羽沼マコト

by a-su

#万魔殿 #誘惑 #ハメ乞い #ポールダンス #過酷  
#電マ #ハーレム

## 操愛

213

京極サツキ

by リュシス61

#催眠 #調教 #依存 #執着愛 #独占欲 #ご褒美セックス

## 神様は何も禁止していない

233

鬼方カヨコ

by 真記也

#逆レイプ #騎乗位 #いちゃラブ #顔射 #ホクロ舐め  
#彼シャツ

## ムツキちゃんの勝ち?

247

浅黄ムツキ

by zeke

#エロ勝負 #騎乗位 #手コキ #即堕ち #片思い

## naked girl on the beach

267

鰐渕アカリ

by あいくち

#露出 #フェラチオ #手コキ #いちゃラブ #対面立位

## 陸八魔アルは動じない (おけないでしょ~!)

287

陸八魔アル

by 夜戦

#陸八魔アル(ドレス) #闇バイト #デリヘル #初体験  
#パイズリ #コンドーム #♡喘ぎ

## 白き掬い手

307

氷室セナ

by 夏橘らね

#氷室セナ(私服) #青姦 #相互愛撫 #濡れ透け #全裸





Featuring  
愛清フウカ  
牛牧ジュリ

#3P

#いちやラブ

#甘々

#半同棲

#食後えっち

#お風呂えっち

Written by  
黒胡椒サラミ



X(旧Twitter)  
@KUROKOSHOSARAMI



pixiv ID  
268073

# 愛清フウカと牛牧ジュリの ご奉仕愛妻性生活

キスで唇を触れ合わせた瞬間の柔らかい感覚も束の間、すぐ先生の舌が私の口の中に入ってくる。私は一生懸命先生の舌と自分の舌を絡めて、夢中で唾液を交換した。ぬるぬるぬるぬる、脳が痺れるような感覚の奥に、ほんのりと、私が作った料理の味がする。

目の前にある玄関のドアが開く少し前から、私はそこで待っていた。「あの人」が仕事のあとにここに来るタイミニングを見計らって、準備を済ませて待ち構えていた。

近付いてくる革靴の足音に耳を澄ませ、ドアノブが動いたと同時に深呼吸し、先生がそのお顔を見せてくれた瞬間、ぱあつと笑顔を浮かべた。そして私は、今日こそ絶対に言ってみようと思っていた台詞を口にしたので。

「——先生、お帰りなさい。今日もお仕事お疲れ様でした。それで、あの……先にお風呂にしますか？ それとも、お夕飯にしますか？」

先生に向かってこういう台詞を言ってみたいと思っている子は、きつとこのキヴォトスにたくさんいる。そして実際に言っている子も、それなりにいる。——先生が皆にとつての「先生」であるということは、そういうことなのだ。

でも私を含めて多くの子は、自分が先生に愛してもらえるのであれば、先生が他の子にも手を出すことを構わないと思っている。

確証はないけれど、多分。

「それじゃあ、お言葉に甘えて先にご飯にしようかな。たくさん働いてお腹ペコペコだし、キッチンから凄くいい匂いがしてくるから、我慢できそうにないよ。ほら、いまお腹鳴ったの聞こえたでしょ？」

「まあ……— ふふっ」

「可愛い笑顔だね、フウカ」

「——えっ？ も、もう。急にそういうこと言うのずるいです」

私の照れた顔を見た先生は、爽やかに微笑んだ。

そこに大人の余裕を感じる。

笑顔だけじゃない。ちょっとした身振りからも、ああ、この人は私たちとは違う「大人」なんだと感じてしまい、そのたびに胸がドキドキする。

「えっと、それで、ご飯の次は——」

「なあに？」

「ご飯の次は、一緒にお風呂に……」

と言いかけて、私は「いいえ、なんでもないです」と誤魔化した。

聞く勇気がなかったのもあるが、いちいち聞かなくても、先生はきつと泊まっていってくれるはずだ。ということは、順番がどうであれ、私は彼と一緒にお風呂に入ることになる。そしてそのあとは、ベッドで先生の身体の下にいるに決まっている。

そう、私は既に先生のモノだ。私だけではなく、いまではシャーレの当番を経験したことがあるゲヘナの子の多くが、先生に抱かれ、先生の「女の子」になっていた。

「フウカ？」

「すっ、すぐにご用意しますね！」

先生に初めて抱かれたときのことを思い出しかけた私は、タバタとスリッパを鳴らしてキッチンに逃げた。そして先生がいらっしゃるまでに九割がた済ませておいたお夕飯の準備の、最後の仕上げに取り掛かった。

といつても、やることは味の微調整くらいだ。煮物の汁をお玉で小皿にとって味見をして、ほんの少しだけお塩を足す。先生は男の人だから、少し濃いくらいが味の好みだ。先生の周りにどれだけ美人で可愛い子がいても、先生の舌と胃袋の好みだけは、私が一番把握しているという自負がある。毎日食堂で時間に追われ、たまには適当な感じで給食を済ませてしまうことがあっても、先生の口に入るものだけは妥協したくない。——と大げらに言ったら、ハルナあたりは怒るかもしれないけど、それが事実だ。

「……うん、よし。火の通り具合も完璧」

微調整後の味見を終えた私は、キッチンで一人で頷いた。

先生に美味しいものを食べてもらいたい。そういう思いから、ハルナは先生を連れ回すし、私は料理に気合を入れる。つまり私とハルナは似ている……？ と、あまり認めたくないことを思い浮かべそうになりながら。

お料理をお皿に盛り付け、先生のところまで運ぼうとして、私は自分の角にかかる髪とエプロンの裾を整えた。それはお料理の味とはなんの関係もないけれど、食後のデザートとして先

生に私を差し上げるときの「味」には関係がある。

「お待たせしました、先生」

私が運んできたお料理を見た先生は歓声を上げた。凄く美味しそうだねと、とてもシンプルで素直な感想を口にしてくれた。私は大好きな先生に手料理を褒められてつい顔がにやけてしまふのを感じながら、「どうぞめしあがれ」と言った。

「いただきます」

そう言われた瞬間、私がゾクゾクと背筋を震わせたのを気付かれはしなかっただろうか。

私と先生は向かい合って食事を始めた。先生がお箸で私の作ったものを口に運び、もぐもぐと嬉しそうに咀嚼する様子を眺めるだけで、幸せな気持ちが胸に溢れた。それだけで、お腹がいっぱいになりそうだった。

先生が食べてくれている。

先生が、私の作ったお料理を。

ずうっとこの顔を眺めていたい。

ずうっと、この時間が続けばいい。

胸に溢れる気持ちを我慢できなくなって、私は口にした。

「……先生」

「ん？ どうしたの？ さっきから全然箸が動いてないけど、ひよっとして食欲ない？」

「あつ、そんなことないです。いただきます。……あの、先生」

「なんだい？」

「大好きです」

「ありがとう。私もだよ」

私は顔が真っ赤に染まるのを感じながら、先生と食事をした。せっかく二人きりのお夕飯なのに、ほとんどお喋りできなかった。私の身体は、自分が先生のお夕飯後のデザートになることを期待して、どんどん熱くなっていた。

先生はお代わりしつつ、さりげなく、私の食べるスピードに合わせてくれていた。お互いほとんど同時に食事を終え、そろって「ごちそうさまでした」と口にした。

「お粗末様でした」

「全然お粗末じゃなかったけどね。今日も最高の料理だったよ。ありがとう、フウカ」

「えへへ……」

「さて、それじゃあ——」

「——!!」

「食後のデザート、いいかな？」

「……………はい♡」

自覚しているが、私は同年代の子と比べて小柄なほうだ。先生と並ぶと身長差は歴然としている。そんな先生に肩を抱かれて、私はお風呂場まで移動した。

これから私たちはセックスする。私だけじゃなく、ゲヘナの

多くの子が先生の恋人になっている。聞いたことはないけれど、たぶん、他の学園の子も。先生を独占したいという気持ちがない訳じゃないけれど、それよりも、わがままなことを言って、こうして定期的に抱いてもらえる幸せを手放してしまうほうが怖い。

お風呂場前の脱衣所に移動すると、先生は私の上から覆いかぶさるように、私を強く抱き締めてきた。

「あっ♡ んんっ♡」

「相変わらず細い身体だね。この身体で、毎日ゲヘナの皆の給食を作ってくれてるんだね」

「せん、せい……♡」

「さっきも台所で料理してるところを見て、思わず抱きしめたくなったよ」

「あうう……♡」

「改めて、ありがとうフウカ」

先生は耳元でそう囁き、私の角をしゅりしゅりと優しく擦るように撫でた。その瞬間、私の視界は真っ白に染まった。

「——っ♡♡♡~~~~っ♡♡♡」

バチバチと火花が瞬き、開いた口からよくわからない声漏れる。お股のあいだがキュンキュンと疼いて、心臓が爆発しそうになる。

（——せんせいっ♡ せんせいっ♡ せんせいっ♡ せんせい

いっ♡♡)

大好きな気持ちのままに、私のほうからも先生を抱き締める。

先生は私の角だけでなく、背中や腰の裏も撫でてくる。私の弱いところは完全に先生にバレてしまっていて、ゾワゾワと背筋を貫く気持ち良さで、一人では立っていられなくなる。

「あっ、あっ♡ はぁあっ♡ あっっ！♡」

服を着たまま、おっぱいやアソコを触られた訳でもないのに、私はイっていた。

「脱がすよ」

「はっ、はいっ♡ お願いしますっ♡」

私のエプロンと制服を脱がす先生の手つきは、とても慣れていた。私以外の女の子もこうして鳴かしているんだと、胸が熱くなる。私も先生のシャツのボタンを外し、服を脱ぐお手伝いをした。やがて私たちは二人とも裸になった。

「可愛いよフウカ」

「~~~~っ♡♡ はぁっ♡ はぁっ♡ はぁっ♡ はぁっ♡」

「落ち着いて。深呼吸して。——……そろそろ大丈夫かな？ じゃあキスするからね」

「んっ♡ んっ♡」

私と先生は両方裸でキスしている。服を一枚も着ていない肌と肌をぴつとりと重ね合わせて。先生の体温や、筋肉がついた身体の逞しさが直接伝わってくる。ヘイローを持たない先生よ

り私のほうがずっと力が強いはずなのに、先生の腕に簡単に押さえ込まれてしまう。

キスで唇を触れ合わせた瞬間の柔らかな感覚も束の間、すぐ先生の舌が私の口の中に入ってくる。私は一生懸命先生の舌と自分の舌を絡めて、夢中で唾液を交換した。ぬるぬるぬるぬる、脳が痺れるような感覚の奥に、ほんのりと、私が作った料理の味がする。

(あぁ……気持ちいいよ……♡♡)

頭の奥にある色んなものが溶けていく。

この気持ち良さがあれば、どんなに給食の用意が忙しくても、ハルナが食堂を爆破しても、ジュリの作った料理が動き出しても平気だ。——いや、平気ではないけど、我慢できる気がする。(あっ、先生の手が私のおっぱい揉んでる……っ♡)

キスしながら視線を動かすと、私の身長に合わせて身をかがめた大人の男の人の手が、おっぱいを柔らかく包んでいた。私の胸は先生にすっかり開発されてしまい、初めは触られても少し痛いくらいだったけれど、いまではとても敏感に反応するようになっていた。おっぱい全体を引っ張るくらい乳首が硬くなっているのが、見ただけでわかった。最近自分でも、自分の身体がエッチになったなとびっくりしてしまうことがある。

「ん……あ……っ♡」

しばらくぶりに先生と顔を離すと、私たちの舌の先端を銀色

に光る粘液が繋いでいた。先生は私のおっぱいを掴んだまま、脱衣所からお風呂場に移動しようと言った。

「は、はい……♡」

そう返事したときの自分が、どれだけだらしのないエッチな顔をしていたのか、私はすぐ知ることになった。お風呂場の鏡に、全身の肌を火照らせ頬をリンゴのように赤くした、角の生えた女の子が映っていたからだ。

その子の目尻はみっともなく垂れ下がっていた。隣で自分の肩を抱く男の人に、身も心も委ね切ってしまったているのが一目で伝わってきた。

その子のアソコは——おマンコは発情し、先生のおチンチンを早く欲しがっていた。

「せん、せえ……♡ も、エッチしたいです♡」

「あれ？ 私たちってお風呂に入りきたんじゃないの？」

「いまさらとほけないでください……っ！ 私をデザートに食べてくれるんですよね？」

「けどフウカも料理の前はきちんと手を洗うよね？」

「あっ♡ あっ♡ 喋りながらおっぱい撫でるの反則ですかっ♡」

先生に抗議しながら、へこっ、へこっとならば腰が動く。私はいつからこんなに浅ましい、エッチな子になってしまったのだろうか、と、自分で自分が嫌になりかける。それでも自分からおマンコ

を両手で掀げ、先生に良く見えるようにした。

すると先生の雰囲気が変わって、おチンチンがぐぐつと大きくなり始めた。

「ほら、奥まで濡れてるのわかりますよねっ？ お夕飯の最中から、先生にエッチされたくてこうなっちゃってたんですっ♡」

「……………」

「入れたら狭くてとっても気持ちいいですよ？」

そんな言葉を紡ぎながら、私もやっぱりゲハナ生なんだなと思っていた。

自分自身の欲望に逆らえない。

先生のおチンチンは怒ったように血管の筋を浮かべて、ミシミシと音を立てるくらい反り返っていた。あれに貫かれたら、私の小さなお腹なんてすぐ埋まってしまう。先っぽがおヘソどころか鳩尾に届いて、足が床につかなくなるだろう。

でもいい。壊されたい。先生になら壊されたい。私という女の子の——愛清フウカの全部を、大人の男の人の手で壊してもらいたい。

「先生のおチンチン専用の愛清フウカのおマンコっ♡ どうかお召し上がりください♡」

私は鏡に手を突き、先生がその後ろに立った。先生にお尻を掴まれた瞬間、私はまた軽く絶頂してしまった。

（は、入ってくるっ♡）

先生のおチンチンの存在感。お尻の後ろにそれを感じる。熱い空気をまとった逞しいモノが、私のおマンコに狙いを定めている。私は恥ずかしさで死んでしまいたくなりながらも、先生が挿入しやすいようにかかたを浮かせてお尻を上げた。おマンコがばくばくと先生を求めていた。

先生の先っぽと私の入口がキスした瞬間、腰が抜けてしまうかと思った。

「入るっ♡ 入るっ♡ 先生のおチンチン♡」

「そうだよ。フウカの一癖の好物、晩ご飯のお返しによく味わってね」

「ふあっ♡ ふああああ……っ♡♡」

甲高い嬌声が私の口から漏れ、ずぶずぶとお腹の中が満たされていく。やがて、私の中は先生でいっぱいになった。

「ああ……最高だよフウカ!」

先生と繋がってだらしな顔をしている私がお風呂の鏡に映っている。目尻はとろんと垂れ下がり、口を開けて、そこからはみ出した舌先からヨダレが落ちそうになっている。先生が腰を後ろに動かすと、内臓ごとお腹が引っ張られる気がした。

「んおっ♡ おっ♡」

まぶたの裏でバチバチと弾ける火花。

自分が男の人に支配されているという感覚。

私は爪先立ちで膝をカクカクと震わせ、先生がくださる愛情

の深さに悶えていた。

「やっぱり、フウカのお腹に私ののはちよつと大きすぎるかもね」

そう言いつつ、先生は私を味わうのをやめたりしない。

「おっ♡ おっ♡ おっ♡ おおっ♡」

「可愛いよ」

——「可愛いよ」じゃなくて、「みつともないよ」じゃないんですか？

そう言いたくなるほど変な声を出し続ける私に、先生はばんばんと腰を押し付ける。私のかかとは浮き上がり、膝がカクカクと笑ってしまう。私が不安定になっても、先生のおっきな手が腰を支えてくれるおかげで、転んだりはしなかった。

（こっ、これ凄いつ♡ おマンコの奥っ♡ せんせいのおチンチンで持ち上げられてっ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクっ♡ うっ♡♡♡）

……ゲヘナの子は、みんなエッチにできている。それはやっぱり嘘じゃないのだろう。だって私もこんな簡単におチンチンでイッってしまう。お腹の奥がぎゅうつと先生を締め付けると同時に、頭の中がふわふわほわほわ、真っ白で気持ちいいのが溢れてしまう。

「そんなに締め付けたら私もイクっ! フウカ! ぐううっ!」

「あっ♡ あああっ♡ 先生の精液っ♡ 奥に流れてくるうっ♡」



「フウカのちっちゃいマンコ、私のザーメンゴクゴク飲んで……っ！ とても気持ちいいよ……！ くうっ！」

「ああ、おおお……っ♡」

先生が、精液をどびゅどびゅ吐き出しながら私のおっぱいを揉んだ。私はお腹の中に溜まっていく温かさを感じながら、全身を小刻みに痙攣させ続けていた。

# 8

「ふう、やっぱりお風呂は気持ちいいね」

「ふふっ、そうですね、先生」

「フウカにはお湯が熱すぎたりしないかな？」

「これくらいでちょうどいいです。……先生も、重かったりしませんか？」

「フウカはすごく体重が軽いからね」

洗い場でセックスしたあと、私と先生は一緒に湯船に浸かっていた。ほかほかと湯気の立つお湯に肩まで身体を沈めた私の背後には、先生の身体がある。

「この姿勢でお風呂に入るのもいいね。フウカの可愛いうなじが良く見える」

「もう、どこ見てるんですか？」

まるで親子のような体格差の私たち。お風呂に入っただけでも、それを感じる。私は髪をお団子に結い、お湯の中に髪が入らないようにしていた。先生は目の前にある私のうなじの匂いを何度も吸っている。恥ずかしいからやめてほしいけど、そう言ってもやめてもらえないので、先生の好きなようにさせてあげていた。

（——でも、本当にいい気持ち）

お湯の中にとすごく安らいで、エッチしているときは違う種類の充実感に心が満たされる。でも私の身体は、先生とのエッチを忘れた訳じゃない。さっきおチンチンから注いでもらったばかりの先生の精液が、おヘソの裏のところで泳いでいるのを感じる。

（こんなふうに、中に出してもらおうエッチばかりしてたら、本当に先生の赤ちゃんできちゃうかも……）

そう考えた瞬間に顔が熱くなったのは、決してお風呂の熱さのせいだけじゃない。揺れる水面下で、私の手が自分のおヘソの下を撫でていたけれど、我ながらすごくエッチな仕事だったと思う。

（あ……っ♡）

そこで私は、股のあいだから伸びてくる先生のおチンチンに

気付いた。

先生も、私の身体がエッチだと思ってくれているのだ。

(先生のあれ、硬そう……。挿れたい……)

私が「勃起」したおチンチンをじーっと見つめているのに気付いているだろうに、先生は何も言わない。先生から「したい」とも、私に「してほしいの？」とも言っていない。おっぱいを揉んで気分を盛り上げるようなこともせず、ただお湯に浸かっている。

しばらくして、先に我慢できなくなったのは私だった。

「——おや？ もうあがる？」

先生は、お湯の中で立ち上がった私を見てそう尋ねた。私は振り返って先生を見下ろした。——ただでさえ生徒の中でも身長の高い私が、先生に見上げられることなんてそんなにない。いつもと違う感じに、胸の奥がドキドキしてしまった。先生は私の考えていることに気付いたのか、「あがらないんだね」と言った。

そう、まだお風呂を終わるつもりなんてない。私は先生の、男の人の筋肉が盛り上がった肩に手を置くと、再びお湯に下半身を沈めた。

私のアソコが向かった先には、先生のたくましいおチンチンが上を向いて生えていた。

「んお……っ♡」

変な声を出さないようにしなくちゃと思っても、先生が私を拡げた瞬間に、どうしてもそんな声が漏れる。そもそも、エッチなことを我慢できず自分からおチンチンを挿れてもらう女の子ってどうなんだろう？ 男の人に嫌われたりしないかな？

「あー、フウカのおマンコお湯より熱くて気持ちいい」

……まあ大好きな先生がいいって思ってくれるならいいや。——そんなことを考えながら、私の腰はもう上下に動き始めている。「あっ♡ あんっ♡」と私が奏でる喘ぎ声と共に、お湯の水面がチャプチャプと波打つ。

そんなとき、浴室の外で玄関が開いた音がした。

「あれー、フウカ先輩？ 先生？ 玄関に靴があるのにいらっしやらないんですか？」

「あの声、ジュリがバイトから帰ってきたみたいだね。……なんだかんだ、あれからもウェイトレスとして頼りにされてるみたいだね。ちょっと安心したよ」

「先輩……？」

「ほら、可愛い後輩がフウカのこと呼んでるよ？ 返事してあげないの？」

「んっ♡ んっ♡ んっ♡ ああっ♡ 先生っ♡ 下から突き上げないでくださいっ♡ あっ♡ あんっ♡ イくっ♡ イくっ♡っ♡♡♡」

「この音……ひよっとしてお風呂にいるんですか？」



でもどうやら、いまは朝じゃないらしい。カーテンが閉め切られた寝室の明かりの元は、柔らかな朝日じゃない。暖色で、ちよつとエッチな雰囲気をする室内灯だった。

そして私が寝かされているベッドの隣のベッドは、ギシギシギシギシと音を立てていた。首を動かして視界に入った光景を見ても、私は驚いたりしなかった。

「あっ♡ あっあっあっあっあっ♡♡」

（はあ、やつぱりね。ジュリと先生もエッチしてると思った）

「せんせっ♡ 先生っ♡ あっ♡ あ~~~~っ♡♡」

（それにしても……ジュリにアルバイト先の制服を着せたまましてるんだ。ふ〜ん）

まだちよつと身体に力が入らない状態で、私はジュリと先生のエッチを眺めた。

ジュリはウェイトレスの格好のままベッドに四つん這いにさせられて、後ろから先生におチンチンで突かれている。先生にピストンされるたびあの子の大きな胸が揺れ、私のときは違って大迫力だ。

（別に羨ましくなんて思ったりしないけど……）

つい見入ってしまう。

先生も、私のときはまだ手加減してたんだっていうのが、ジュリに対する腰の打ち付け方の遠慮なさからわかってしまう。

大人同士のセックスってこういう感じなのだろうか。

「はっ♡ あっあ♡ すごいですうっ♡ あっ♡ あ~~~~っ♡♡」

（牛牧っていう苗字は伊達じゃないなあ……）

と、ぶるぶる前後に暴れるおっぱいを見て思った。

二人のセックスを見て、なんだかムラムラしてきた私は、自分でも知らないうちにおっぱいとアソコを弄り始めていた。

「先生っ♡ そんなに気持ちいいところばかり突かれたらイっちゃいますっ♡ 少し止めてっ♡ 休憩させてくださいっ！ あっ♡ ああっ、ん~~~~っ♡♡」

「そんなこと言って止まるわけないでしょ。ジュリがそんなスケベなおっぱい見せて誘うのが悪いよ。このまま中に出すからね」

「はっ、あああああっ♡♡♡」

私にはいまのジュリの気持ちがよく分かった。

やめてと言ってもやめてもらえない。普段はひたすら優しい先生に、ああして身体を貪られる感覚。それが何より私たちをゾクゾクさせるのだ。

おもむろに先生はジュリの中で射精した。スカートの下のジュリのお尻を掴んで、その手に逃がさないぞという意志を存分に込めて。ジュリは背筋を反らし、閉じたまぶたから伸びる長いまつ毛をピクピク痙攣させながら、本当に気持ち良さそうに先生の射精を受け止めていた。

「ふうふう……まだ出るよジュリ。ジュリのおマンコで、私の精液全部飲むんだ」

「はっ、はいい……♡♡♡ んっ♡ んっ♡」

「いい子だね。フウカも起きたみたいだし、次は三人でしようか」と言って、先生は私の方に笑いかけた。二人のエッチを眺めながら私がこっそりオナニーしていることも、先生は既にお見通しだった。

そのあとウェイトレスの服を脱いで裸になったジュリと一緒に、私は先生に抱かれることになった。

でも——。

「せ、先生？ この格好、さすがに恥ずかしいんですけど……」

「どうして？ 赤ちゃんみたいで可愛いよ、フウカ」

「だからそれが——……ああもう！ ジュリ？ ジュリも何か先生に言つてよ」

「フウカ先輩、すごく可愛いです」

「……………はあ」

ベッドに正座したジュリが私を膝枕し、私はお股を大きく捻げて、おむつを変えられるときの赤ちゃんのような格好をしていた。先生のおチンチンは相変わらず元気いっぱいに反り返っていて、私とジュリにたくさん中出した直後とは思えなかった。

私は二人に巻き込まれた被害者みたいな顔をしながら、心臓

はドキドキだった。先生のおチンチンを求めてアソコがひくひくしているのがジュリにもバレないかどうか心配だった。——

ジュリはそんな私の表情ばかりじっと見つめてきて、下を見るこの子のピンク色の綺麗な髪がカーテンのように私の顔の周りに降りていた。

（あ……綺麗……）

私が後輩の整った顔とクリームソーダ色の瞳に見惚れたように、ジュリのはうも、うっとりした表情で言った。

「フウカ先輩の髪って、どうしてこんなにつやつやで綺麗なんでしょうか……。色も黒くて羨ましいです……。顔もあどけなくて妖精みたいで、それに、この角も——」

「ひやあっ!?♡ ジュ、ジュリ!?」

「あつ、ご、ごめんなさい！」

ジュリの細い指。なかなか料理が上手くないけど、いつも頑張っている細い指が、私の角をついと撫でた。それと同時に頭の中を直接撫でられたような感覚がして、私は少しいつてしまった。それまで私たちのやり取りを微笑ましそうに眺めていた先生は、そのタイミングで私のアソコにおチンチンを挿入してきた。

お腹の中で、ごりつと音がした気がした。

「ひぐううっ!?♡♡♡♡」

「先輩!? だつ、大丈夫ですか!?」

「ひぐっ♡ ひゃっ♡ おっ♡ ほおっ!?♡♡♡」

「せ、先生！ フウカ先輩にそんなに乱暴におチンチン出し入れして大丈夫なんですか？」

「心配なら、君がフウカのことをよく見ててあげて、ジュリ」

「おっ♡♡ おっ♡♡ ほおっ♡♡ ひぁっ♡♡ あぁあっ♡♡♡」

「フ、フウカ先輩」

ジュリの手が私の手をきゅっ握った。彼女はハラハラと私を見つめてきた。ジュリのおっぱいが目の前ですごい。先生のおチンチンがお腹をこりこりえぐってすごい。全部すくって、全部がよくわからなくなっていく。

「ソっあ!?♡♡♡♡」

脚がつま先までピーンとなっていった。おヘソのところが先生のおチンチンの先っぽの形に盛り上がっているのが見えた。精液がびゅるびゅると奥に噴き付けられた。

「ぐっ！ うっ！ フウカあ！」

先生が私を呼ぶ声にも余裕がなくなっていた。先生は、男の人の本能を剥き出しにした感じで、ぐりぐりと私に腰を押し付けながら射精していた。

「あっ……♡ は……♡ はあ……♡ はあ……♡♡」

「せ、先輩……」

「ジュリ、次は君がおマンコ出して」

「えっ？」

「早くしなさい。フウカの上に四つん這いになるんだ」

「わ、わかりました。失礼します、先輩」

まだ絶頂を続けている私に謝ったジュリが、そっと私に対する膝枕をやめて、身体の位置を移動させた。彼女の両手は私の頭の左右に置かれ、お尻は先生のほうに向けられた。——先生は、私からにゅぽんと引き抜いたおチンチンを、即座にジュリに挿入した。

「——んほおっ!?♡♡♡♡」

後輩が口から舌を突き出して酷い声を出すのを見て、私は少し安心した。先生のおチンチンに勝てないのは、私だけじゃないんだって。

（うわぁ……やっぱすごい）

さつきは隣のベッドで見ていたジュリのおっぱいが揺れる様子が、今度は目の前で披露される。ぶるんぶるん、たぶんたぶん、視界に残像を残しそうな勢いで二つの大きなスイカが揺れている。イカされたばかりで放心状態の私は、実際これがスイカだったら甘い中身がたっぷり詰まって美味しいだろうとか、ジュリの淡いピンク色の乳首が、大きなプディングの上に乗ったサクランボみたいだなと思っていた。

「先生っ！♡ もうイっちゃいますううっ♡♡♡♡♡」

「ああいぞジュリ！ イキなさい！ フウカに君がイクとこ

ろを良く見せてあげるんだ！——ぐううっ！」

「あっ♡ ああ~~~~♡♡♡♡♡ 先生のミルクが、私の中にいっぱい出てますう……♡♡♡♡♡」

精液のことをミルクっていう表現、どこで覚えたんだろうと思いつつ、私は自分の髪をかき上げながら、首を少し起こしてジュリのおっぱいを口に含んだ。

「んっ♡ ちゅっ♡ ちゅうう……♡」

「あう……♡♡♡ フウカ先輩、は、恥ずかしいです」

ジュリは先生に中出しされながら顔を赤らめた。私とは逆に、ジュリは自分の胸が大きすぎることがコンプレックスらしい。

「別にいいじゃない。ジュリのおっぱいがおっきいのは事実なんだから。——ちゅっ♡ ちゅうう♡♡」

「はあう♡ んん……♡♡♡ せんばあい……♡♡」

「給食部の先輩後輩で仲が良くて羨ましいなあ。私のことも忘れないでね？」

と、先生は他人事のように言っているが、私たち二人をおチンチンでダメにしているのは先生だ。私とジュリは先生のおチンチンの前にすっかり骨抜きで、先生にどんなことをされても、結局は許してしまう身体になっていた。

この部屋だつてジュリとわざわざ二人でシェアして、先生にいつでも私たちを「使つて」もらえるように準備しているのだ。そのあと私とジュリは、ベッドの上に立った先生を前後から

挟み込んで、お口でご奉仕した。私が先生の精子が詰まった袋を唇で甘噛みし、ジュリが舌で先生のお尻の穴をほじった。

「ふう、最高だよ二人とも」

私たちのご奉仕を受ける先生は、私の角を自転車のハンドルのように掴んでいた。

（あっ♡ これ♡ 先生の所有物になってるっていう感じがすごい……♡）

他の人にこんなふうに角を触られたら嫌だろうけれど、先生にこうされているというだけで、目尻が勝手に下がってしまう。ジュリも私を羨ましそうに見て、同じように先生に角を握ってほしそだった。

「ん、はむ♡ 先生♡ はむ♡」

「ちゅっ、ちゅるっ♡ じゅるっ♡ 先生……♡」

「本当に気持ちいいよ。こんないい生徒を持つて私は幸せだなあ」

精子の袋を唇で甘やかしてから、先生に角を持たれたままおチンチンの先っぽを口に含む。精一杯の愛情をこめて先っぽを吸い、頬っぺたでくぼくぼと音を立てる。できるだけ喉の奥まで咥え込んで、裏のスジのところを舌で舐め上げる。そうしているときやおチンチンが震えだした。精液を出したいという合図だ。

「うっ、出すよフウカー！」



——はい、出してください先生♡ 私は舌の動きでそれを伝えた。喉奥で出された精液はコッテリ濃厚で、フォンデュを使うチーズみたいだった。味はエグくて苦くて決して美味しくない。鼻に抜ける匂いも「臭い」と表現すべきものだ。なのにどうして、どうしてこんなに癖になるんだろう。

先生のお尻の穴を舐めているジュリも、きっと同じ気持ちのはずである。そう思っただけでジュリを見たら、先生の精液をゴクゴクと飲む私を羨ましそうに見ているあの子と目が合った。

(もう、仕方ないなあ)

私は先輩として、ジュリに場所を代わってあげた。ジュリはたちまち顔を輝かせ、さっきまでの私のように先生に角を握ってもらいながらおチンチンをしゃぶり始めた。

「じゅるっ！ じゅるっ♡ じゅるるっ♡ じゅぼっ♡ じゅぼっ♡」

「うっ、ジュリのパキュムすっ！？」

「ジュリ、あんまり激しくしたら先生のおチンチン取れちゃうわよ？ ——ン♡」

「フウカのちっちゃな唇が私のアナルに優しくキスして——……あああっ」

いまの私たちを客観的に見たら、裸の先生の周りに同じく裸の私たちがまわりつく、すごくエッチな風景に違いない。でもこれで私たちは幸せなのだ。

お口でのご奉仕を終えた私たちは、仰向けの先生に交代で降り、騎乗位で腰を振った。

「はおっ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡」

「先輩、次はまた私ですかね？」

「うんっ♡ わかてるよジュリ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ 先生のおチンチン、頭のてっぺんまで響くっ♡ きっ、きもちいいっ♡ またイっちゃう……っ♡♡♡」

「フウカのマンコに搾られる……っ！ 流石にキツくなってきたな……」

「私のおっぱい吸いますか？ 元気が出るかもしれませんよ？」

——はい、どうぞ♡」

「ちよっ、ジュリ!? んぶっ!？」

「イクうっ♡ あー、気持ちいいっ♡ ふふっ、今度は向き変えますね、先生っ♡」

私は先生に跨ったまま一八〇度身体を回転させ、先生に背中を向けた。いったん失神してから妙にハイになって、もっともとセックスしたいという気持ちが出なくなった。

「くっ、ゲヘナの子たちはこれだから大変だ！」

先生は口では弱音を吐きながらも、おチンチンはまだまだ元気だった。

それからいったい何度体位を変えて、何度先生に射精していただいたかわからない。私もジュリも、身体の内側と外側の両

方を先生に染められて、明日からも給食部を回さなくちゃいけないことなんかも忘れ、先生のことだけを考えていた。

（あゝあ、今日こそ私が先生を労わってあげるはずだったのに……）

でも、このおかげで明日からも頑張れそうだ。——ジュリと一緒に淫らな顔を並べ、両手をお皿にして真っ白な精液を受け止めながら、私は思った。

「——ほら、たくさん出してあげるから、二人とも零さず飲みなさい」

「ありがとうございます、先生♡　じゅるうう♡」

「大切に飲ませていただきますね♡　ずぞぞ……♡」

「はあ、もうすつからかんだよ」

両手に溜まった精液を吸り、もぐもぐと囓ってから飲み下す。ジュリも同じようにしていた。

おマンコの奥も、肌の表面も、顔も髪も角も、それから胃の中も、全部が先生の色と匂いに染め上げられていた。

そこまでしてもらって、ようやく心と身体が満足できた。

「それじゃ最後にシャワーを浴びてから眠るとしようか」

「はい、そうですね。——ああジュリ、その格好のまま眠っちゃだめよ！」

「うゝん……先輩？」

「もう、おっきな身体のくせして子どもみたいなんだから。——

先生？　さつき私にしてもらったみたいに、お風呂場までジュリを抱っこしてあげてもらえますか？」

「もちろん。なんならフウカも一緒に抱っこしようか？」

「そんなことしたら、いつかみたいに腰を痛めちゃいますよ？」

私がわざと怖い声で叱ると、先生は頭を掻きながら、「参ったなあ、フウカには敵わないよ」と言って笑った。

先生が、半分寝てしまったジュリを抱え上げると、私たちは三人でお風呂場に入った。そこで最後に一回だけ先生にしてもらったのは、ジュリには内緒だ。そして綺麗な身体になった私たちは、先生を中央に身を寄せ合うようにして眠ったのだった。

## §

翌日のお昼時、ゲヘナの食堂はいつものように戦争状態だった。

「ジュリ！　ジュリ！　そっちはいいから私が焼いた目玉焼きお皿に盛ってえー！」

「はっ、はい！」

「あとウインナーも！」

「はい、フウカ先輩！」

「おい早くしろよ！　いつたい何時間待たせるんだ！」

「さっさとお昼を寄越さないと暴れるぞー！」

カウンターの向こうには何百人もの生徒がいて、口々に好き勝手なことを言っている。私とジュリは厨房の中を走り回っていた。

「いてっ!? いま押したの誰だ! お前か!」

「そっちがぶつかってきたんでしょ!」

「なにい? やるのか!」

「やる気!」

当然のように戦闘が発生し銃声が響き渡る。トレーや食器がひっくり返る音がして、大人しく食事していた生徒まで戦闘に参加した。

「人のお味噌汁に手りゅう弾投げたの誰!」

「ほーっとしてるほうが悪い!」

「早く飯寄せ! 飯!」

既に食堂は大混乱だ。厨房にまで爆弾が飛んできて、台無しになった作りかけの食事を前に呆然とする私に、ジュリが大声で呼びかけた。

「フウカ先輩!? しっかりしてくださいっ!」

「知らないわよもう……。好きにして……」

「そんなあ! 私一人でどうすればいいんですか! 先輩  
いいっ!」

「——うわあああっ! なんだこの鍋の中身、一人で動いてるぞ!」

「おいコラ! 何を騒いでるんだ!」

「ヤバイ、風紀委員だ!」

「給食部! この騒ぎの元凶はお前たちか!」 —— つてなんで  
美食研究会がいるんだよ!」

「あら、イオリさん。奇遇ですわね。このあいだ美味しいお店を発見したので、これはぜひフウカさんにも味わわせてあげたいと思ったのです。それが何かいけないことですか? —— さあフウカさん、出かける支度をなさってください」

「それでどうしてロープを取り出すわけ? ハルナ」

今日もこの学園の治安は最悪である。

しかしこの学園の生徒の食欲を支えることが、私たち給食部の使命だ。——それを全うすれば、きっと先生も私を褒めてくれるだろう。そう思い、私は今日も鍋とフライパンを振るうのだった。